

四條金吾殿御返事

弘安元年一〇月 五七歳

鷺目一貫文給ひ候ひ畢んぬ。

御所領上より給ばらせ給ひて候なる事、まことゝも覚へず候。夢かとあまりに不思議に覚へ候。御返事なんどもいかやうに申すべしとも覚へず候。其の故はどのゝ御身は日蓮が法門の御ゆへに日本国並びにかまくら中、御内の人々、きうだちまでうけず、ふしぎにをもはれて候へば、其の御内にを^{御座}はせむだにも不思議に候に御恩をかうほらせ給へば、うちかへし又うちかへしせさせ給へば、いかばかり同れいどもゝふしぎとをもひ、上もあまりなりとをぼすらむ。さればこのたびはいかんが有るべかるらんとうたがひ思ひ候ひつる上、御内の数十人の人々う^訴ったへて候へば、さればこそいかに^{如何}もかなひがたかるべし。あまりなる事なりと疑ひ候ひつる上、兄弟にも^捨すてられてを^{御座}はするに、かゝる御恩を^殿ん面目申すばかりなし。かの^殿処はどのをかの三倍とあそばして候上、さどの国のものゝこれに候が、よくよく其の^知処をしりて候が申し候は、三箇郷の内にかだと申すは第一の^少処なり。田畠は^得ずくなく候へども、とくは^量はかりなしと申し候ぞ。二所は^{御年貢}みねんぐ千貫、一所は三百貫と云云。かゝる^{同僚}処なりと承はる。なにとなくとも、^云どうれいといひしたしき人々と申し、^捨すてはてられて^唾わらひよろこびつるに、^殿とのをかに^劣をとりて候^悪処なりとも、御下し文は給ひたく候ひつるぞかし。まして三倍の^悪処なりと候。いかに^悪わろくとも^悪わろきよし人にも又上へも申させ給ふべからず候。よきところよきところと申し給はゞ、又かさねて給ばらせ給ふべし。わろき^た処徳分なし^杯など候はゞ天にも人にも^杯すてられ給ひ候はむずるに候ぞ。御心へあるべし。

阿闍世王は賢人なりしが、父を^殺ころせしかば、即時に天にも^捨すてられ、大地もやぶれて入りぬべかりしかども、^殺殺されし父の王一日に五百りやう、五百りやう^間数年が^{あいだ}間仏を供養しまいらせたりし功德と、後に法華經の檀那となるべき功德によりて、天も^破すてがたし、地もわれず、ついに^墮地獄に^殿をち^殿ずして^殿仏になり給ひき。とのも又かくのごとし。兄弟にも^僚すてられ、^仇同れいにも^公あだまれ、^達きうだちにも^側そばめられ、日本国の人にも^憎にくまれ給ひつれども、去ぬる文永八年の九月十二日の子丑の時、日蓮が御^{ねうし}勘^{かん}氣^きをか^被ほりし時、馬の口にとりつきて^相鎌倉^模を出^依でて、^智さが^供みのえち^{えんぶだい}に御ともありしが、一閻浮提第一の法華經の御^方か^人たう^人どにて有りしかば、梵天・帝釈も^背すてかねさせ給へるか。仏にならせ給はん事もかくのごとし。いかなる大科ありとも、法華經を^背そむかせ給はず候ひし御

ともの御ほうこうにて仏にならせ給ふべし。例せば有徳国王の覚徳比丘の命いのちにかはりて釈迦仏とならせ給ひしがごとし。法華経祈はいのりとはなり候ひけるぞ。あなかしこあなかしこ。いよいよ道心堅固にして今度仏になり給へ。

御一門の御房たち又俗人等にもかゝるうれしき事候はず。かう申せば今生のよくとをぼすか。それも凡夫にて候へばさも候べき上、欲離をもはなれずして仏になり候ひける道の候ひけるぞ。普賢経ふげんに法華経の肝心を説きて候「煩惱を断ぜず五欲を離れず」等云云。天台大師まかしかんの摩訶止観ぼんのうそくぼだいに云く「生死しょうじ即涅槃そくねはん」等云云。竜樹菩薩の大論に法華経の一代にすぐれていみじきやうを釈して云く「譬へば大薬師よの能く毒を変じて薬と為すが如し」等云云。「小薬師は薬を以て病を治す、大医は大毒をもって大重病を治す」等云云。

日 蓮 花 押

四条金吾殿御返事